



1983年(昭和58年)
12月号(No. 462)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- 日本の山と海外の山……………(1)
ラダック報告(3)……………(2)
カンチェンジュンガ縦走計画……………(3)
海外の山……………(3)
クライン・マッターホルンと
エーデルワイス・シュピッツェ……………(4)
ビルチャールの山と谷……………(4)
林和夫さんの急死に思う……………(5)
雪と氷のシンポジウム……………(6)
山の本……………(8)
バルンツェ・1980 山岳憧憬
常念の見える町 大雪山のヒグマ
千葉大東ネパール学術登山隊報告書
白神山 槍ヶ岳開山・播隆
東・西・南・北……………(12)
飯山山行 第26回紅葉会 諸塚山
紅葉山行 秋期山行 両神山
第16回図書交換会……………(14)
お知らせ……………(14)

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜 10時～20時
水・金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

▶冬休み 12月29日(木)～1月6日(金)

日本の山と海外の山

原 真

日本はうつくしい山国である。そのことには異存がない。ただ、海外の山を知ったあとでは、日本が山国であっても山がすくないという、妙な印象をもたざるを得ない。

氷河地形のなかにある山―おおくの場合高山だが、フィッツロイのような例外もある―は、構造が単純にして明快であるだけでなく、山麓やベースキャンプ地から、山の全体像がみえやすいという特徴をもっている。この特徴ゆえに、山は、登山者に、直接的な登行意欲をあたえる。登山者は、山をながめ、そこをのぼってみたいと感じ、ルートを検討し、のぼることが可能かもしれないと判定

し、好奇心をもち、そして山肌をさわってみるために出発する。日本の山の場合、山頂はなだらかで、谷がふかい。それゆえに山麓からでは、山がみえにくい。せまい谷の兩岸以外の視界を断たれてしまうのが普通だからだ。V字谷だからそうなる、私はおも

う。こうした谷にとじこめられ、視界を失った状態でいれば、頂上

は観念的な存在でしかなくなる。頂上に登ろうという意志は、山の姿から触発された動機という要素をうすくするのではない。すくなくとも、頂上へむかう気分が、肉感的でなく抽象的になりやす

い。日本の山でも、一部のたかい山

には、頂上付近に氷河地形(氷はないが)の残存物があって、その辺までのぼると、はじめて展望がひらけ、アルペン風の雰囲気につながる。穂高、剣、立山、幌尻あたりに、ちょっとだけ、そういう場所があるが、大部分の山岳地は、こと展望にかんしては、閉塞状況にある。氷河にかこまれた山は、いかにも山らしいと私は感ずるのだが、そういう山を本当の山だとすれば、水に浸蝕された日本の山は、どうも山らしくない。

最近の情勢からみて、日本人が日本の山だけを山とする必要はなからう。世界中の山がわれわれの対象である。日本の山で、ヒマラヤ遠征の模擬訓練をするといったことが以前には行われたが、いまはその必要もない。そうすることが、かえって有害の度合をたかめるとさえ思われる。豊のうえの水

練のようなことを、やりすぎれば害になるということなのだ。害毒は、不自然さという心理上的影響として、もっともあらわれやすい。

日本の山は、挑戦の対象としての視覚的要因に欠けるきらいがある。どちらかといえば、明快さや客観性に乏しいのである。日本の山は、対決するよりは、あじわうのに適している。山旅や炉辺閑話の友とするのにふさわしい。日本の山における、登山技術とは、その大半が生活技術のことである。苛烈な冬山においてさえ、そのことはただし。登山の技術が生活技術と登攀技術と高所順応技術とに分れるとすれば、第一の技術のみが、日本の山では重要なのではない。登山技術と高所順応技術

が眼目になる山、それが海外の山である。すくなくとも、日本人が、海外遠征と称して、おしかけてゆく山々は、そんな山のことだ。こういう風にかんがえてくると、海外の山を日本の山の延長線上におかない方が気分の上でまともがよい。日本の登山家が日本の山を愛するのは結構なことだが、ふかなさげがすぎるとよくない。日本の山が世界でいちばんうつくしかったり、炉辺閑話趣味が岩のぼりより高級であったりするはずはない。日本の山は世界の山の極く一部であるにすぎない。

島国日本の登山家は、もしかれが、健全な精神のもち主ならば、当然、世界の山々へ拡張したいと思うはずだ。「日本の山も登っていないくせに、海外登山なんてけしからん」という批判は、老人のひがみであろう。海外の山にのぼってみるまでは、日本の山も、本当の味がわからぬといった方が、まだしも、まともなかんがえだ。それよりも、登山の世界戦略は、島国の登山家の方が、かえって有利に計画しやすい、と思ひこむのがよからう。

お知らせ電話
234 六六五九

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

ラダック報告 (三)

山本朋三郎

普通、カルギルには夕刻バスは到着するのだが、途中のゾジ・ラ(峠)通過で、対向車がエンジン・トラブルで道をふさいでしまい、五時間以上遅れ、翌朝四時出発まで二時間ほどのうたた寝。出発時刻前に集合の早いのは、洋の東西を問わず年寄組。出発時刻をすぎてもまだ集合しない者もいる。利己主義が他人に大きな迷惑をかけるのも、その国の歴史と教養がムキ出しに顕われるのも、こんな時。

アフリカ地塊から遊離したインド大陸が、アジア大陸に激突して出来た、荒々しい山容のラダック山脈、ザスカール山脈の、一木一草も生えぬ岩砂漠の大地溝を、軍用道路は谷間や大昔の河床台地を通る。レイとスリナガル間、四四六キロ、たつぷり二日のバス旅行である。Bクラスのバス、定員三十三名。運賃五十八ルピー(一六二四円位か)、二日目には大体乗客の顔もおぼえる。

ポプラを育てている、川沿いの小平坦地には、大概街道沿いに、道の両側に二十軒位の、一五×三〇釐大の日干しレンガを箱状に積上げ、天井は泥をふいただけの、チャイ売りの店の扉もまだ開いていない。六時バスは小休止。何という部落か判らぬが、既に此処からはチベット文化圏で、チャイをたのむと、おもしろいようなチベット風のクッキーが、ポプラの小枝を編んだ盆に入れて出る。

スリナガルから、ラダックのレイに入った、最初の外国人は、一七一六年、仏人宣教師でイッポリト・デシデリという探検家で、苦心して此の旧道を歩いている。多分二十日位はかかっているだろう。日干しレンガでのチャイは、彼もさぞうまかったであろう。バスの停る所は、うまい具合に、二―三時間位の距離にチャイを売る小部落がある。

今日も、百台以上のコンボイ(トラック輸送団)が朝モヤをついて、エンジンの音をとどろかせて峠を登って来る。中国との国境警備軍の物資輸送を前日に終えた空軍である。一九六二年、国際紛争で中国・インド国境不明確であ

ったアクサイチン地方を、中国が占領した。アクサイチン地方は、ヒマラヤ山脈をグルリと裏側に廻ったトランスヒマラヤで、シルクロードの南路も含まれている、昔から要路のある地域である。

世界地図を拡げてみると、チベットやタリム盆地から、気候の良いインドス平野への最短距離でもあり、ヒンズークシ山脈とヒマラヤ山脈との間の、比較的高度の低い大地溝帯を通るのが、レイとスリナガルを結ぶシルクロードの一部である。大きな大きなヤカンに譬えて、もし中国のタリム盆地に水をためると、チベット方面から自然に水が流れ出るような地型なのが、このラダック地域である。

スリナガルから一日掛りで到着したカルギルは、ラダック地方の第二の集落であり、イスラムの影響の濃い町である。ムルベックを通り、ナミカ・ラ(峠)三七一八米を越す頃は、一木一草も生えぬレイへの軍用道路であり、人の顔型も、純東洋的な住民である。チベット服を着ていなければ、日本の田舎の老人と間違えう位である。言葉は通じないが、何となく安心感が湧いて来るのも、変なものである。

ザンスカール山脈のフォテユ・ラ、四一〇七米の黄土色の岩礫の峠には、チョルテンが一つ。振り返ると、ヌン(七三二五米)クン(七〇七七米)のある、ジャンム

ーン地域の雪山がキラリと輝く。ここからは下り一方の岩礫帯。軍用道路開設のため、発破で岩山を崩しただけの峠道の路肩には、太古此の辺りが海底であった証拠に、原始的な海藻類の化石が、スレート状に割れる岩層に見られる。一面に化石のガレキである。

普通、此の辺りをバスはノンストップなので、まさか化石のガレキの山の上を走っているとは、旅行者には判らない。丁度、対向車が輻がせまい峠道でエンストして、中々動かないので、持て余した待機時間、車を降りて小便に行った者が化石の岩クズを発見。おや、化石だ、の聲に我も吾もと思ひもよらぬ化石拾いが楽しめた。専門知識のない情けなさ、まだ人類出現前の古い古い原始の海藻の化石だろうと、独り悦び入ってザックに沢山採集。

流石に此の辺りは四一〇七米の峠越えなので、バスの車中、あちこちで呼吸変調をお互に確かめている。今迄、砂ホコリの軍用道路は立派なアスファルト舗装となり、グングン高度を下げて、遥か下方に流れるインドス本流目指してバスは下る。

大昔、インドから仏教を伝来した、シルクロードが、インドス河につかず離れずに羊腸と続く。旧道の要所々々には大きなチョルテンが、長い長い年月を示すように、幾十となく一列縦隊に並んで

いる。一木一草生えぬ苛酷な大自然の山中で生活する人間が、必死に宗教にすがって、生れそして死んでいったシンボルでもある。

このチョルテンの系列縦隊の、製作年代を考証する時、レイよりの方のチョルテンが新しければ、チベット仏教はスリナガルから、ラサに伝播されたことになり、スリナガルよりの方のチョルテンが新しければ、インド仏教はネパールのルンビニ(シヤカ生誕地)から、カリガンダキ沿いにムスタンを通して、ラサに伝来され、チベットで密教が成熟して、プラマブドラ河を遡行、インドス河源流を越えてラダック地方に仏教伝来したとも思える。

仏教伝来の道順を研究するには、レイのゴンパにある仏像とラサにある仏像の年代考証、そして、密教の完成されて行く年代と伝来させた仏教徒の研究をすれば、仏教伝来の道順も判ると思うが、無知なる故に宗教の天空を帯でかき廻すに等しい。会員の中の諸賢に、ぜひ此の点を披露して戴きたい。

むずかしい事を考えている中に、扇状台地に、ラダック第一の人口八千人のレイの町が夕陽に輝いて、一直線に下る軍用道路の遥か彼方に見えて来る。ジュレイ・いらっしやい。(続く)

お年玉に『山日記』を

カンチエンジュンガ縦走登山

計画の進捗状況

日本山岳会創立八十周年の記念事業の一環として、一九八四年フレンススーンに実施するカンチエンジュンガ縦走登山隊の準備は、会員各位をはじめ、諸方面の暖かいご支援をうけて、ほぼ順調に進んでおります。ここでは十一月下旬の段階での進捗状況について、ご報告いたします。

1 隊の編成

隊の編成については、隊長の鹿野勝彦、チームリーダー重広恒夫、長谷川良典、平野隆司以下、學術班、報道班を除く隊員25名がほぼ内定しました。學術班については生理、気象、地質などを中心に約六名、報道班については日本テレビ、読売新聞より六・七名が、近日中に内定いたします。

2 装備、食糧などの準備

現在、日本運送のご好意により晴海埠頭に倉庫を借用し、装備、食糧などの物資を集荷中です。十一月後半から梱包作業に入り、十二月下旬には輸送業者へ引き渡します。隊荷は全体で約八トンになる見込みで、一月下旬カルカッタ着、二月中旬には通関を終えて、キヤラパンの起点、ダーランバザールに到着する予定です。

3 行動計画

先発隊は、隊荷の輸送、シエルパとの契約、物資の購入などのため、一・月末二名、二月上旬に六名程度がカトマンズに向け出発します。本隊は二月下旬日本を出発、タブレジュン、ヤンボディンを経て三月下旬、ヤルン氷河の標高約五五〇〇メートル地点にベースキャンプを建設します。南峰から中央峰、主峰を経て西峰への縦走は五月上旬になる見込みで、また、標高八〇〇〇メートル以上からのハンググライダーによる飛行も、縦走とは前後して実施される予定です。

4 資金計画、その他

資金的には、隊員の自己負担金、日本テレビ、読売新聞の後援金のほか、現在、各方面で募金活動を行なっております。また、装備、食糧等については、すでに現物で相当量の寄付を頂きました。出発まで三ヶ月余を残すだけとなり、隊員候補をはじめ、委員会一同、鋭意準備活動をすすめておりますが、今後とも、ご支援のほどお願い申し上げます。

(鹿野 勝彦)

海外の山

エベレストの遭難

片山 全 平

今秋、カモシカ同人隊が敢行したエベレスト無酸素登山における吉野寛(三三)、禿博信(三三)遭難死については既報したが、登頂した遠藤晴行(二六)の報告をもとに、改めて検証してみたい。十月八日C4(七九八五メートル、サウス・コル)を午前三時出発、八〇五〇で山学同志会隊(川村晴一、鈴木昇己)と合流。同隊は米メディカル・ルート(南稜ではない)經由で南東稜に出た。さらに米東壁登頂三隊員(ビューラー、モム、ライカート。隊長はジム・モリシー)と八五〇〇で合流。米隊はボンベ二本、個人装備など一人当たり二十キロの荷重ながら「こちらが五歩あるくあいだ、米隊は十歩」(遠藤)のスピードで頂上へ。

南峰(八七六五)頂上へは、イエティ隊のなかでは遠藤がトップ。五十分遅れで禿が、ついで一時間半遅れで吉野が到着(遠藤は南峰直下のあん部でザイルを残す)。

あん部(八七六〇)を午後二時半出発。ヒラリー・ステップ(約十メートルのチムニー状)では、登頂して降下する米隊とはち合わせになる。古いフィックス二本に、あらたにフィックス一本を米隊が張っている。まず米二隊員が降下、ついで鈴木が登攀、そして米残り一隊員が降下、ついで遠藤が登る。

鈴木、川村、遠藤は午後四時二十分から三十分

に、相ついで登頂。遠藤はあん部に午後六時三十八分に帰着。残置ザイルを枕に、ザックを敷いて横になり、約十時間睡眠(その間五、六回目が醒め、おう吐。外は月はなく、星空)。吉野、禿とは連絡のないまま一夜を経過した遠藤は、九日午前六時ごろ、南峰を去るとき「吉野(ヒラリー・ステップ周辺)を確認したが、禿は岩かげにいたと思った」(遠藤)。これが最後となる。

この二つのパーティの明暗の分岐点はどこにあったか。A装備(吉野は羽毛ズボン八五〇〇に残す。遠藤は終始羽毛服を着用。「ヒラリー・ステップで」日本人はから身。手袋を与えた)の米隊の発言(朝日・山田)は吉野、禿の場合だけではないが、日本人全般に軽装だったことが言える。Bバーク地点(遠藤より、吉野組の方が三十メートル高い。しかも吉野組は西向き。遠藤は東向きの雪庇の下。「この相違はあの高度では肉体的にかなり違いが出たと思う」(遠藤)。

遠藤自身、平衡感覚マヒ、脚の硬直を訴え「ピッケルを突くのに定まらず(能機能)、足はピンとなつたまま」南峰に上つたというのである。しかも吉野はチョゴリで足親指一本、禿はダウラギリ主峰で両足全部凍傷切断している。滑落したとすれば、「この肉体的ハンディは大きい」と、遠藤は無酸素登山のきびしさを推測している。

遠藤は、八一年のアンナプルナ南壁のとき、八千メートルまでの経験が唯一。しかし禿、吉野はすでに述べた通りであり、国内においても、「まだ十日前のC3建設にも、吉野は抜群の力を発揮していた」(遠藤)。しかし、昨夏チョゴリの登頂でビバーク、帰国後の入院は、吉野の肉体を本格的に復調させていなかったのではないか。これは、登頂隊の組織的活動とともに今後、若い日本人クライマーに背負わされた命題だと思ふ。

クライン・マッター
ホルンとエーデルワ
イス・シュピッツェ

坂倉登喜子

今夏七回目のヨーロッパ・アルプス山麓歩きの旅は、八月十日から十二日間、全国から集った六十名の皆さんと共に、いつもながらの花と氷河の楽しい山歩きをして、二十一日無事帰国しました。

毎年好評のツェルマットのモンテローザホテルを基点とする、ゴルナーグラートからフィンデルン・アルプや、シュバルツゼーからマッターホルン・ヘルンリ小屋コースの他に、去る五十五年から乗物で登れるようになった、クライン・マッターホルン・コースを、去年から展望コースとして加えることにしました。

足の弱い人のために、このコースをC班として、ヘルンリ小屋まで登る足の強いA班と、ゆっくり歩くB班を見送り、私たちのグループは、乗物に乗り継いで、三八二〇メートルのクライン・マッターホルンの肩まで登りました。

トンネル状の通路から雪上に出ると、山頂から二十キロ滑り下りられるという大スキー場がひろがっていて、夏スキーを楽しんでいる姿が見られ、広大なスキー場にびっくりしました。

その日は風がおだやかだったので、左側の岩峰につけられた展望台まで、ところどころフィックスしてある岩稜を攀ちて、約六十メートル登ってみました。

頂上に立つと、本物のマッターホルンがぐっと低く見え、それに続く雪峰がことごとく見渡せて、三六〇度の展望。直ぐ近いブライト・ホルンに登っている人の姿も見え、山頂付近の雪面がきらきら輝いて、凄く魅力的でした。

降り足は足の届かない場所もあった、心配でしたが、何とこの山頂まで去年からエレベーターができて、足弱の人たちもこの展望台へ登れるようになったとかで、私たちはエレベーターで楽に下山、下で待っていた数人の人たちも、展望台までエレベーターで往復できて大満足でした。

このエレベーターは十六人乗りで、料金は無料。クライン・マッターホルンは三八八三メートルの富士山より高い展望台で、ヘルンリ小屋(三二六〇メートル)より乗物ながら高く登れた訳だった。

さて今年も後半にアンコールコースとして、オーストリアのハイリゲン・ブルートへ行く途中、エーデルワイス・シュピッツェ(山)二五七六メートルの花の山へ登りました。三年前地図上で発見した、私の好きな花の名の山に、今年登れたのは大きな喜びでした。この山は、昔はエーデルワイスが

沢山咲いていたそうですが、現在は、金山お花畑に埋もれてはいませんが、エーデルワイスは見られませんでした。この山は小型車なら登れる車道が頂上に通じていますが、歩いて登る道には色彩が美しい花が一面に咲いていて、エーデルワイスがなくても、私には今年の新しい山の発見であったように思われました。

この谷奥のパステルツェ氷河から、去年できたというダム沿いの新コースを初めて歩いて見ましたが、上のバス道の途中からおりる去年のルートよりずっと楽しい花の小径で、指導標も完全についていて、歩き良い下山コースでした。去年と同じダム付近で中食をとり、同じ場所エーデルワイスを探しましたが、去年より下の方で立派な花が八本見つかり、その深々とした綿毛の花に大感激して、この山行の目的を果たしました。ハイリゲン・ブルートのホテルポストは、去年の印象が良くて又訪れた宿。長い谷道を歩いて汗ばんだ後、ホテルのテラスでガイドたちとビールで乾杯しましたが、その美味しさは格別でした。その頃シャモニーから七百キロを車でこられた近藤等氏が、テラスに訪てきて下さり、明日ガイドと、オーストリアの最高峰のグロスグロックナーへ登られると伺い、外国での出会いのひとときを楽しく過ごしました。

ビルチャール

の山と谷

砂田 定夫

最終日のミュンヘンの夜は、有名なホフブローイ・ハウスでお別れパーティを催し、無事に山行が終ったことを喜び合って乾杯!!
ハウスのサービスで来てくれたアコーデオンを弾く人のリズムに

少ない日数であったが、パキスタン北部へ出かける機会を得た。イスラマバードからギルギットまではアボッタバードを経て650 Kmのドライブ。氷河の水を集めて滔々と流れるインダス川の激流を目にしたときは、それにまつわる歴史と文化を思い、感動的な気分だった。ギルギットからはぼ東方のオアシカンダマではジープを利用。そこからはナンガ・パルバットが望める。バグロット川の左岸に沿ってビルチャールまで約8 Kmのキャラバンにはポーターを雇ったものの、40度を越える炎天下で些か脱水状態。対岸台地に美しいコティの小村を見てビルチャール谷に入ると、両岸峭壁が切り立ったV字谷の奥に輝くビルチャール・ドバニ峰(6134 m)の鋭い姿が強烈に目に焼きついた。

ビルチャール村と最奥の集落タ

乗って、さくらさくらやエーデルワイスの歌、さてはお国自慢の郷土の歌も出て、東京勢の東京音頭まで、最後は「今日の日よりよなら」の歌で、涙のフィナーレとなり、別れが惜しまれました。

イソット、その人々は遠来の日本人を珍しそうに朝早くから見物に集まってくる。村には枝もたわわに実のついたアンズ(「アブリコット」と呼ばれる)やリンゴの木が多く、村人たちはそれを供し歓迎の意を表わす。山岳地帯だけに女性には顔を隠し、人目を避けるイスラム教の風習が強く残っている。田畑にはトウモロコシ、ジャガイモ、ムギ、タマネギなどが地形をうまく利用して栽培されている。氷河から流れる水が土地を豊かに潤している。小高い所から見ると田園風景は、荒涼とした山あいには濃淡の緑が絵のように美しい。ビルチャールから上は羊飼いのハイポーター達を雇う。彼らの一部はBC1のアルプ(3650)までロバを利用する。そこからBC2(4080)へのモレーン帯はすべて担いで荷上する。モレーンの中間にお花畑があり、ウスユキソウ、フウロ、サクラソウ等の類が咲いて心をなごませてくれた。牛の放牧されたアルプは長閑で展望の佳所。ドバニ山群や南側の5450 mに連なる氷と岩の峰々が峻しい表情で我々を見つめ

追悼

さる九月二十五日、林さんは車の事故で急逝された。翌日早朝この知らせを会員から受けた時、余り突然のことで私はわが耳を疑ったのであった。

つい二ヶ月前、中学時代に登ったトムラウシに五十年ぶりで昔の仲間達と登りに行ったばかり、六十七才でなお澆刺として、高根ヶ原の豊富な駒草の群落に感嘆の声を挙げていた彼の姿が目につく。若い時からハイアルピニズムを心がけ、海外登山に憧れていた林さんが、山ではなしにこのような事故死を遂げるとは!!

林さんと私は、札幌の中学時代から五十年來の山仲間である。札幌近郊の空沼岳から空沼入りの沢を下り、定山溪まで歩いたのが一九三三年(昭和八)のこと。その夏続いて天人峽(昔の松山温泉)からトムラウシに登り、高根ヶ原を歩いて、表大雪から層雲峽へぬけた五泊



五十年ぶりのトムラウシで

六日の山行は、当時中学生だった私達にとって、極めて強力な山の印象をもたらしたのだ。翌三四年、彼は中学でクラスメートだったバブ(葛西晴雄)、アリ(私の兄有馬洋)と一緒に北大へ進んだ。もちろん三人はこの春憧れの北大山岳部に入ったのである。この年の夏彼ら新入部員は、西村正さんをリーダーとして北日高滑若山に初登頂するが、帰途、カムイエクウチカウシ山の下山でルート

本を戦争へと運命づけており、ヒマラヤ遠征は所詮高嶺の花であった。そこで林さん達は北大予科三年の冬に、当時冬の未登峰であったペテガリ岳へと矛先を向けた。ポーラメソッドによる、当時としてはパイオニア的だったこの試みは、悪天候のため挫折し、撤退を余儀なくされた。ついで三年後、一九四〇年の冬に再度、葛西、有馬をリーダー(林さんは卒業を間

ある。日本山岳会の若手理事として、また北大山岳部のOBとして活躍したことは忘れてはならないことであろう。大戦後五年、アンナプルナ登頂を初めとし、わが国でもヒマラヤに遠征隊が相次いで出されたが、林さんは日本山岳界のこのような趨勢の下にあって、黙々として事業家としての仕事に取組んでいたのであった。彼のヒマラヤ志向の情熱は、かくして実に三十年近い歳月を経てから実現されたのである。一九八〇年厳冬の七千米峰バルンツェ遠征に、彼は総隊長として参加し、その年十二月十三日に見事に登頂に成功したのである。晩年彼は度々私に「僕は実に幸運な男だ。アリやバブのように山でも死なず、戦死もしないで生きて来られ、そして四十年來の夢が叶ってヒマラヤに登ることができた」と。

ている。羊飼いの若者や少年たちは羊や山羊を追って登ってくるのが日課で、少年たちの澄んだ目と人なつこい笑顔が印象的。BC2からの登山活動はドバニとその周辺の山を目指したものの、一週間の日程で高度順化も充分できず、天候不順も手伝って、稜線のC1(4910)へのサポートに終わったが、一週間先発した3名がドバニ西方の無名峰(5350)に登れたのがせめてもの救いだった。登山を終って、ビルチヤールの村を振り返る目に、氷河を懸けたあのドバニの冷やかな表情が映った。

林和夫さんの急死に思う

有馬 純

状態で札内川を下ったことがあった。林さんは後年、この時消耗し切った少年達を迎えに來た北大山岳部の先輩達(中野征紀・坂本直行氏ら)の遅しき、男くささになく感動し、一生山登りをやるぞと心に誓ったと回顧していた。

昭和十年代の初め、立教堀田弥一氏らのナンダコート成功は、若い北大山岳部員達を刺激し、海外登山へと情熱をかき立てたが、そのグループの中心に林さんがいたのであった。しかし時代は既に日

このようなラッキボーイの林さんの終末が交通事故死だったとは、運命の皮肉と思われるかも知れぬ。しかし人の一生の意味は、長い時をかけて考えるべきであろう。私は、林さんが六十七才の完成された立派な歩みをなした終え、天に召されたものと信じていた。

イスラマバードへ帰るまでの二日間の余暇は、ギルギットを基点にフンザへツアする。カラコルム・ハイウェイを走ってカリマバードへ行き、ミールの居城跡を見物、途中でバキスタン山岳通で知られる本会会員の広島三朗氏一行に会う。一泊したグルミットの近くにはグルミ、バルカシニ、シュトバといった氷河がある。フンザでの圧観は何と言っても比高5000mというラカボシの北面と、白きたおやかな「ディラン」の眺めだった。

昭和十年代の初め、立教堀田弥一氏らのナンダコート成功は、若い北大山岳部員達を刺激し、海外登山へと情熱をかき立てたが、そのグループの中心に林さんがいたのであった。しかし時代は既に日

林さんはこの年春北大を卒業し上京するが、電気工学を卒業した彼は、既に戦争酷戦であった社会状況にあつて、軍需工場に働き、戦後は西村工業での会社生活を送りつつ、山への精進を続けたので

一ヶ月余を過ぎ、大峡谷の奥にたたずまう緑美わしきビルチャーの村落と彫りの深い村人たちの顔、そして峻険なドバニと周辺の山々を懐かしむ今日この頃である。

(北大山の会副会長)

報告

雪と氷のシンポジウム

——寒冷地の雪と暖候地の雪——

日時 昭和58年10月29日 13～21時
会場 東京 渋谷 勤労福祉会館
主催 日本山岳会 科学研究委員会
後援 日本雪氷学会・日本気象学会

科学研究委員会は、昨年の名古屋大学水圏科学研究所における第1回シンポジウム「大いに語ろうヒマラヤの自然」に引き続き、今年には東京で雪氷学会・気象学会が開かれたのを機会に、第2回シンポジウム「寒冷地の雪と暖候地の雪」を開いた。

昨年の経験に鑑み、個々の講演に対して、十分討議の時間を設けるとともに、雪崩や氷雪面上の滑落など、登山に直接関係のあるテーマも採り上げ、山と登山の科学について理解を深めて頂く一助とした。より詳しい内容はシンポジウム予稿集に記されており、残部は一部五百円で頒布中なので、関心のある方は申し出られたい。

なお山田知充氏は御不幸のため帰札されたので、講演3は同氏のスライドなどを用い、渡辺興亜氏が代読した。

(出席者) 佐々保雄、金坂一郎、松田雄一、荻原賢司、遠藤光男、木名瀬亘、中村あや、市川義輝、飯田肇、高原浩志、武中誠、渡辺興亜、井上治郎、清水弘、山田穰、対馬勝年、新田隆三、中村純二、中川和道、高遠宏、小西奎二、大森弘一郎、梅野淑子、松丸秀夫、高橋詢、斎藤かつら、滝口正一、大木淑子、千葉重美、以上二十九名

(中村 純二)

1 はじめに

東大・教養学部 中村 純二

今回の雪と氷のシンポジウムでは、水分を含まず乾いていて、手で握っても固まりにくい寒冷地の雪と、水分を含んでいて重く、固まりやすい暖候地の雪を、メインテーマに取り上げ、両者を対比しながら、降雪から積雪・融雪までの諸過程や、気候・地形との対応、あるいは氷雪によって惹き起こされる諸現象を検討することにした。

今回講演を快諾された講師の方々、特に今回のシンポジウムの企画から運営まで全面的に協力頂いた渡辺興亜氏に、委員会としてお礼を申し上げる。

2 地球上の寒冷雪と温暖雪の系列

名大・水圏研 渡辺 興亜

地球上、高緯度から中緯度まで広がる積雪域は、数日間雪が消える「降雪域」、冬期間を通じて積雪が地面を覆う「季節積雪域(根雪域)」、および年間を通じて消えることのない「永久積雪域(氷河氷床域)」に分けられるが、これらは緯度・高度のほか、降雪量その他の気象要素や地形の影響も受け、複雑な分布を示す。

この場合、雪の温度が零度以下零下3度までで水分を含む場合と、雪温がほぼ零下3度以下で乾いている場合とでは、堆積状況から、積雪の変態過程、さらに雪崩の発生機構や形態に至るまで様子が異なるので、区別する必要がある。各地域では、その地理的気候的条件を反映して、これらいずれかの性質が卓越している。

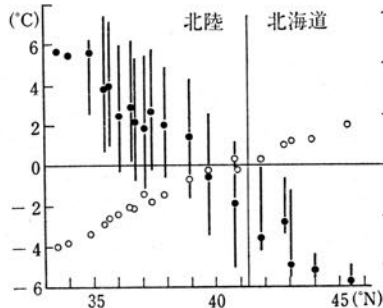
寒冷な雪の代表は、極地の高所で見られ、全く雪の融解はなく、積雪は時間とともに霜さめめ化し、積雪層は脆弱になる。ヒマラヤの高所で発達する霜さめめ層は往々にして雪崩の原因になる。

温暖雪の典型は、我国日本海沿岸平野部で見られ、同地方ではさらに豪雪という特別な条件を備えている。破壊的な全層雪崩が繰り返し起るほか、湿度を含んだ中間層が滑り面となる特徴的な雪崩の起る所以である。

3 寒冷地(北海道)の降雪と積雪

北大・低温研 山田 知充

図は日本海沿岸地方平野部の最寒月である1月の平均気温(黒丸)と、月平均最高最低気温(黒丸に重ねて引いた縦線の上下端)を、緯度に対して画いたもので、緯度の高い北海道では、月最高気温も氷点下になっている。同時に白丸で年間降雪日数も示したが、北海道では冷たく乾いた雪が降り続き、積雪は日数とともに増す。融雪期に入ると積雪量は一進一退し、その後雪解けとなる。



北海道山地では、高度とともに積雪量が増し、気温も低いので積雪量が多く、積雪期間も長い。これらの雪は、風に飛ばされ、吹溜りや雪庇を作るので、積雪形態は複雑である。このような積雪傾向は中部山岳地帯でも見られる。

4 暖候地(北陸・近畿山陰)における降積雪

京大・防災研 井上 治郎

北陸より西の日本海側平野部は、緯度は同程度だが、西に行くほど降雪量が少なくなる。これは冬の季節風が日本海上を進むとき、韓国からソ連に至る海岸線から日本までの距離に差があり、海上での水分補給量が異なるためである。

一方内陸部の降雪量は、主に山岳による気流の強制上昇度で決まる。近畿・山陰では山が低いいため、北陸に比べて降雪量が少なく、紀伊半島や四国の山にも雪を降らせる。山の降雪量は山脈走行が主風と直交するとき最大で、新潟山地は北西風のとき多く、北アルプスでは西風のとき最大となる。

暖候地では、数百個の雪の結晶が絡み合った雪片(ぼたん雪)となっており、雪片が部分的に溶けた状態で降るので、着雪を起す。しかも積雪後変態を起しやすく重くなるので、森林被害や家屋の倒壊、交通渋滞などは、却って山陰で多い。重い雪が不定期に豪雪となつて降る現象は、世界的にも特異な現象で、今後の観測例の集積が望まれる。

個々の豪雪では、日本海上の収束雲、すなわち若狭湾・山陰沖などに発生する小低気圧が注目される。また西日本南岸の低気圧は、太平洋側の山に大雪をもたらすので、注意を要する。

5 雪崩についての一般的性質とその寒冷地での特徴

北大・低温研 清水 弘

1 雪崩分類(日本雪氷学会会)

分類基準	I 発生形態		II 雪型	III 滑り面位置
	点発生	面発生	乾雪	湿雪
	表層	全層	表層	全層

面発生乾雪表層雪崩と面発生湿雪全層雪崩が多い。点発生全層雪崩は事実上存在しない。運動形態としては、①流れ型、②けむり型、③爆風型の三種類がある。

2 国際分類(ICS173)

各雪崩につき、発生・雪質・滑り面位置だけでなく、運動や堆積状況など9項目について分類記述するもので、雪崩研究資料となる。

3 雪崩発生

積雪の変態により積雪強度が弱くなり、積雪に荷重がかかると発生する。人・動物の行動や、雪底崩落・風圧・落雪などが発生の引き金となる。融雪期の全層雪崩以外は地形・天候などに左右され、予想は大変困難。

4 雪崩の滑り面(積雪弱層)

高所や寒冷地の積雪層は、等温的な焼結現象によつてしまり雪に変わった後、温度勾配に基づく変態により、霜さらめ雪層となる。積雪内部や底部の霜さらめ化ないし、小霜さらめ化も雪崩の滑り面を形成する。融雪期には浸水により、底面のぬれさらめ雪層が滑り面となる。表面がクラストして滑り面となる新雪表層雪崩も多い。

6 暖候地の雪崩について

国立防災科学センター・雪害実験研 山田 穰

暖候地の雪崩は、降雪期の湿雪化に基づく積雪の弱化によるもので、霜さらめ雪による寒冷地の雪崩や、浸透水による底面抵抗の減少によつて発生する融雪期の全層雪崩とは区別される。

一般に雪が湿ると、支持力が低下して雪崩になりやすいが、特に豪雪時には駆動力が増大し、大規模な面発生雪崩につながりやすい。逆に高温の全層雪崩が、次第に浸透状態さらに水びたし状態を経て、完全にさらめ雪化すると、支持力低下型の全層雪崩になることがある。特に我国暖候地では、湿雪中間層の内部凍結によつて、ラム硬度の劣化やラム硬度の偏差の増大が生じ、これが滑り面となる特殊な雪崩も見られる。この時雪温は湿雪層内で零度を示し、上下の層より高くなっている。

暖候地雪崩の特徴は、積雪量の年変動や地域差が大きく、年や地域により異なる雪崩の発生すること、また積雪の変態は水分が多く雪温の高いほど速やか進行するので、降雪期間であるか否かを問わず繰返し発生することである。

全層雪崩発生率は降雪期には低地で多く、融雪期には山岳地帯に多い。降雪期間の雪崩は例外なく積雪層の部分的浸透状態で発生していることが明らかにされた。

7 暖かい雪と冷たい雪の物理的性質の違い

富山大・理学部 対馬 勝年

正確な学術用語ではないが、暖かい雪とは暖候地に降る湿った雪で雪温はほぼ零下3度以上、水分が糊の役目をし、電線樹木に着雪して雪害を起す。冷たい雪とは寒冷地に降る乾いた雪のことで、風に飛ばされて瞬時にテントを埋めたり、雪庇を作ったりする。

積雪状態は、冷たい雪は明瞭な成層構造を示すことが多く、時間と共に焼結を起し大きい雪粒に変って行く(しまり雪)。その後地熱の影響などで積雪内部に温度勾配が生ずると霜さらめ雪となり、結合が弱くなって雪崩を惹き起したりする。暖かい雪では積雪内部に水が浸透するので成層構造が破壊され、凍結による等温変態が進んで強度の弱いさらめ雪となる。冷たい雪に比べて暖かい雪では水が融けて凍ればよいので変態は極めて速やかに起り、降雨や気温上昇により、容易に雪崩れる。

雪には粘性や引張り強度があり、密度の大きいほど、また温度の低いほど大きい。密度0.5以上では楽に歩行でき、物体上の積雪が下の雪とつながると、家屋が倒れたり、樹枝が折れたりする。

雪には吸音性もあり、厚さ2cmの雪の壁で、音の強さは10分の1になる。音速は、密度0.4のしまり雪で毎秒1kmの程度である。

8 人体と氷雪面の間の有効摩擦係数

東大・教養学部 中川 和道

積雪期登山の氷雪面での滑落事故は全事故件数の約25%、死者は全事故死者数の約16%に及ぶ(昭和29~50年、長野県警)。これら事故対策の一環として、富士山五合目、谷川岳天神平、中央アルプス千畳敷等有効摩擦係数 μ の測定を行なった。有効と断ったのは、滑落時の摩擦係数の中に氷雪面のかき分け効果や、接触面の不均一性等含まれているためである。

測定法には、摩擦係数をバネ秤で読みとる方法と、一定距離(たとえば10m)の斜面を滑落する時間を測る方法を併用したが、いずれも誤差は±0.1程度である。

30°~45°の斜面で実測したところ、ナイロンやこれに防水加工した布地を着用した人体の場合、 μ の平均値は0.3、安全ベルトその他突起物を着用した場合は0.5となった。これまでの文献によれば、岩と人体の間の μ は0.6、雪と人体0.5、氷と人体0.4との値もあるが、ナイロン地の影響もあつてか測定値は小さく出た。斜面は気温零下5~10度の半ば凍った雪面であつたが、今後冷たい雪と暖かい雪の差についても実験を試みたい。

小物体では雪のかきわけ効果が少なく μ は0.13~0.2であつたが、これからも安全ベルトに相当する突起物の着用は有効と考えられる。

9 雪崩遭難

—その傾向と対策— 林野庁・林業試 新田 隆三

雪崩は融雪期の午後に取りやすいが、氷河雪崩は全く予想できず、日本では特に湿雪がどれだけ降るかに依存するようで、ケーススタディが必要である。スイス雪崩研究所や米林野局からの定期刊行物など参考になる。

統計では雪崩に巻き込まれた場合、10人に1人は死亡。またデブリに埋没すると3人に2人は死亡となっており、死亡率は高い。面発生湿雪全層雪崩は大きな事故につながりやすい。

雪崩の予想される場所では間隔を開けて歩くと共に、雪崩紐や雪崩トランシーバーの携行が有効である。しかし実際には紐が切れたり、トランシーバーが身体から離れたり、友人を救助した直後再び流されたが、発信に切替えてなかったりの事例が報告されている。

流された場合、できるだけがいてデブリ表面に出る努力は有効である。デブリに埋まると体温は一時間につき、3~5度ずつ低下し、心臓部が30°以下になると凍死する。このため埋没後30分で50%が死亡との統計が出ている。掘り起した際、20°以下の手足のマッサージは却って心臓を冷すので、先ず心臓を暖めること。窒息も死因となるので、手で顔の前面に空洞を作る努力も必要であらう。

新刊の本

山の紹介

バルンツェ・一九八〇

宇都宮大学

バルンツェ登山隊報告書

これは宇都宮大学山岳部の人々が、一九八〇年秋にネパールヒマラヤのバルンツェ（七二二〇米）登頂を試みて、見事に成功を収めた登山記録である。この隊と記録書の特徴といえることは、

①ヒマラヤ登山の経験者もいない大学山岳部が、手さぐりで立案し、準備をし、一度で目的を達し、立派な報告書まで出したのは見事である。斉藤隊長のもとによりチームワークが保たれたこと、優れたシエルパに恵まれたことなどを特記しているが、さらに強運の人々であったともいえる。また隊員八名、シエルパ三名からなる、

かなりの規模の隊であったが、九五六万円と比較的少ない費用で済ませた手腕も仲々のものである。

②専門家ではなく、隊員の写したもののだが、見応えのあるきれいな写真が多い。

③医療、装備、食料、輸送などに関する記録も、よく整理されている。特に九大から特別参加された井上ドクターの記述は、門外漢の筆者にも、その綿密な研究態度が窺える。さらに資料という項を設け、必要とした全ての提出書類や、登山許可書などの写しを洩れなく掲載してある。記録としての価値とともに、今後初めてヒマラヤを目指す人のよい指針となる。

④若い人々の達意の文章に敬服。いかに合理的で優れたシステムや用具を駆使しても、所詮登山の本質は人間の行動そのものである。まことに情緒的なスポーツだともいえる。どのようにして計画が芽生え、山では如何に困難と戦ったのか、隊員はどのように振舞ったのか、そのメンバーシップはどうであったのか、等の人間記録こそ、登山報告書の中心となるべきであろう。

この隊にあっても、強い隊長に対する信頼と批判、隊員同志のからみあい、その中でよいチームワークを作り、計画を達成した様子が、若い隊員の文で伝えられている。特にこの隊の中心的存在であ

った大庭民雄さんの隊員紹介、日誌、随想等が良い。今の若者を基本的には評価しているが、ものを書かせるとどうも、などと考えていた偏見が、少なくとも宇大隊の若い人々については破られたのはうれし。

以上の内容は、記録としても立派なものであると同時に、これからヒマラヤに出かける人々にとっても、役に立つ教科書である。

私事ながら、筆者等の北大隊も、宇大隊に三ヶ月おくれで、同じルートをとどり、厳冬のバルンツ

山岳憧憬

大石 真人 著

書名「山岳憧憬」から受けるひびきでは、少し堅い感じがするが、詩文的な内容にはむしろ「プ・アルプ」へのあこがれと云った方がふさわしい紀行随筆集である。

今まで山の雑誌や山村民俗の会報などに連載された文章を纏めて出版されたもので、多くの優れた紀行や随想や案内記事があったにもかかわらず、一冊の本に纏められたものがなかったで、今回の出版は大石氏としては、遅すぎた刊行とも云えよう。

内容は、色彩のある山々、プレ

エを目指した。今この本を通読し、旅の日々をなつかしく回想した。そして折角癒りかけているヒマラヤ病という熱病が、またしてもぶり返しそうな恐れを感じる。B5判、二二二頁、宇都宮大学ヒマラヤ遠征委員会発行、定価三〇〇〇円

(林 和夫)

(注) 執筆者林和夫氏は、九月二十五日急逝されました。本編は氏の遺稿です。ここに謹んで哀悼の意を表します。(書評委員会)

・アルプ、おくむさしのしずく、

いで湯のアンソロジーの四つのブロックに、それぞれの詩心と自然描写が克明に記録されていて、文章の中にリズムが聞えてくるような気がした。今は惜しまれつつなくなつたアルプ誌にふさわしいような、名文が幾つか残されているが、昭和十年以後奥武蔵の沢歩きから、冬の奥武蔵、特に浦山周辺の記述はことさらに民俗奥が濃い。居住地から地の利を得た心のふるさとしての奥武蔵通いの頃が、著者として戦前の活躍時代ではなかっただろうか……。

奥武蔵愛好者たちで会を作った時の初代会長が今は亡き河田植氏、その次が大石真人氏、そしてその後が私だったこともあって、大石氏とのつきあいは、現在の奥武蔵研究会発足以前からで、奥武

蔵の山や沢や民俗の話など、よく聞かせて貰ったものである。

その後仕事の木材新聞編集長を経て、現在の木材産業コンサルタンツ創立後、全国的に各地を歩き、その都度全国の温泉を探索、持ち前のトラベルライターとしてのガイド記事を発表、現在は温泉案内記や七福神めぐりなど、自営の緑書房より多数出版されている。又一方木材産業関係の著書も多く、この業界では著名なコンサルタントとして、現在も活躍中で、全国への出張と温泉調査が両立するという好条件にも恵まれている。

私は大石氏の出版記念会に出席した時、サイン入りの著書を頂いてから、何かと山行や山の仕事で多忙な日が続き、今まで読む暇もなく過ごしていたところ、今回書評依頼を受け、早速一気に読了した。新ハイ誌上の記事は別として、大石氏が温泉の随筆として初めて書かれたという「山のいで湯の七日間」―櫛形山麓金山鉱泉にて―の一文が、今は亡き千代夫人への心の便りのように思えて、後に残るものを感じた。

畦地梅太郎氏の版画は著書にふさわしいものだが、欲を云えば山村民俗の写真や情緒のある温泉場の素朴な写真があればと思った。昭和五十七年三月、緑書房発行、定価六五〇〇円

(坂倉登喜子)

常念の見える町

安曇野抄

蜂谷 緑 著

この本のあとがきで著者が書いていっているように、掲載されているものの殆んどは、雑誌『アルプ』に載ったもので、残りは本書をまとめるに当り、著者が別に筆を執った。

内容は二部に分かれ、第一部は、著者が太平洋戦争中に疎開した安曇平を中心としたもの、第二

部は、著者が家族や知人たちとでした山行を中心にしてまとめたもの。

第二部の「山と人間」との中で見られる著者の子供たち、夫、など大勢の人々を描写した箇所には、著者の暖かな眼を感じるが、この依ってくるところは、第一部「はるかなる安曇野」にあるように思う。

著者の筆による安曇野は一篇の詩、それも犀星の『小景異情』にみる故郷を思い出させる。

陸士にいながら敗戦を迎え、やがて病に倒れこの世を去っていった、著者の兄が語られるところでは、瞬時にして価値の動転を体験し晴れやかな青春を失っていった

若者の姿が浮き彫りにされる。また満蒙開拓義勇軍に志願した少年の壮行式の模様も書いている。『わたしの安曇野』には、著者の描写力とも相俟って、心打つものがある。

著者の過ごした豊科町が町場のせいか、近在の農村部にみられるような陰湿な疎外感を感じさせるものがなく、救われた気持だが、その農村部の声として、陽の当らぬ場所にいる者にとっても、同じ「安曇野」であるように、と願う気持を添えておこう。

B6判、二一三頁、一九八三年六月、実業之日本社刊、定価一三八〇円

(岡沢 祐吉)

大雪山のヒグマ

小田島 護 著

明治時代以後、和人が北海道に入植するにしがたい、ヒグマは人間の生活に重要な被害を及ぼす危険な動物として恐れられ、つねに駆除すべく撲滅作戦が展開されてきた。にもかかわらず、いまなお北海道各地にこのような大型獣が生息していることは、今日の開発の進んだ国土の狭い日本において、その存在すら奇跡に近いと考える人がいるかもしれない。

しかし、これは取りも直さず北海道の自然が、いまその豊かさを保ちつつけていることを証明しているものにほかならないが、ヒグマは元来、山の奥地や大雪山などのような高地帯のみに分布していたものではなく、わずか一世紀前には、広く北海道全域に悠々と生活していたのである。人間の開拓の歴史は、ヒグマにとって受難の歴史でもあるが、現在ではその姿すらほとんど人間の前に現わすことはなくなった。大雪山といえどもその例にもれず、登山者がその姿を遠くからでも垣間見ることができた、その幸運を喜ぶべきだというのが現状である。しかもその生活の実態は、未知なことば

かりで、不思議なことに、最近まで野生ヒグマに関する本格的な調査研究は、ほとんどなされていなかった。

『大雪山のヒグマ』の著者、小田島護氏は写真家でもあるが、その数少ない野生ヒグマの研究者のひとりでもある。著者はその初期の数年間を黒岳石室の管理人などを

して、大雪山で暮らしている。そしてその後の大雪山における長い取材活動とおして、その豊かな行動力と経験をもとに、ここに野生ヒグマに関する記念すべき第一歩を踏み出したのである。

『大雪山のヒグマ』は、美しい大雪山の四季をとおして、とくに

野生ヒグマにとって理想的な生息地といわれる大雪高原沼一帯を生地の場所としていた、通称K子ファミリと呼ばれる三頭の親子グマを中心とした貴重な観察記録でもある。K子親子の観察は、一九八〇年と一九八一年の連続観察一三七日間の長期にわたるものである。これは著者のいう「野生ヒグマの連続観察」としては、おそらくこれからも記録に残るものと思われる。もので、K子親子の姿は、麓から訪れる春にはじまり、山頂をかざる可憐な高山植物、山肌に錦と燃える紅葉、荒涼としたきびしい初冬の季節へと移る、大雪山の美しい自然の写真とともに収められている。

また本書は、現在まであまりにも未知の世界であった野生ヒグマに関するわかりやすい入門書ともいべきもので、とくに「登山とヒグマ」の項は、これから大雪山を訪れる登山者にとってより役立つ参考書となるだろう。

私達の目に写るK子親子の生活は、大自然の中でほほえましくも悠々と暮らしており、私達に憧れさえいだける。しかし「山稜を行く親子の後姿には一抹の淋しさが漂う」ように、K子親子の生息する自然環境は、野生ヒグマに残された最後の数少ない生活の場所でもある。それは私達人間に真の自然の存在を教えてくれるものであるが、いかなる理由があるにして

も、執拗な人間世界の介入は、野生動物の滅亡のみを意味する。

この取材において、著者と公園管理者側との間で種々のトラブルがあったと聞く。大雪山は国立公園であるばかりでなく、大雪山高地一帯は国の指定した重要な特別天然記念物地域であり、特別保護地域でもある。このことは、いかなる研究者や登山家においても、定められたルールは無視して行動できないことになっている。もっとも後手後手にまわる貧弱な現状の公園管理行政に、その責任は帰されるべきであるが、自然公園を利用するものは何人といえども定められたルールは厳守しなければならない。

こうした人間社会中心のトラブルが原因の一つと考えられるが、この『大雪山のヒグマ』が発行された年に、K子から独立したばかりの二頭の子グマは、有害獣の名のもとに捕殺されてしまった。あまりにも人間に接近しすぎた危険な野生動物として駆除されてしまったのである。

日本には大雪山の奥地といえども、野生動物の安住の地はすくないのであろうか。この生れたばかりの『大雪山のヒグマ』が、野生ヒグマへの備忘録にならないことを祈ってやまない。

一九九頁、昭和五十七年十月、山と溪谷社刊、定価三八〇〇円 (保田 信紀)

千葉大東ネパール 学術登山隊報告書

沼田 真 編

千葉大学では一九六三年以来、この二十年間に、'63、'71、'77、'81年と前後四回の学術登山隊を東ネパールに派遣し、ヒマラヤ登山と生態学的調査で大きな成果をあげている。この中の一九六三年隊(ヌンブル初登頂)については、「山」二四〇号に、一九七一年隊(マカルーII峰)については、三七四号の図書紹介欄にそれぞれ紹介されている通りである。この度、一連の学術調査のリーダーとなっていた沼田教授の退官を機に、一九七七年隊、一九八一年隊の公式報告書と二冊の英文報告書が、同時に刊行されたので、まとめて紹介したい。

①東ネパール・タムール流域の生態学的調査とマカルーの登山——一九七七年千葉大学東ネパール学術登山隊報告書

第一部「登山報告」は、マカルーII峰登山の詳細な報告である。一九七一年に引きつづき北西稜を登路に登頂を目指したが、氷の状況、天候共に悪く、七四五〇mで引返さざるを得なかった。しかし報告書としては高所順応を含め参考になる点が多い。

考になる点が多い。

第二部「学術報告」、第三部「フィールド・ノートから」では、主要論文の東ネパール・タムール川流域の森林構造をはじめ、蘚苔類、蝶、草地……自然保護に至るまで広範囲におよび、ネパール側隊員 P.R. Shukya 氏の Vegetation in East Nepal の特筆される。第四部「遠征資料」も細部にわたっており参考になる。

B5判、三五六ページ、昭和五十八年三月、千葉大学ヒマラヤ委員会刊、非売品

②東ネパール・アルン谷の生態学的調査とバルンツェの登頂——一九八一年千葉大学東ネパール学術登山隊報告書

前記①に引きつづき行われた学術登山隊の報告書で、第一部「バルンツェ登山報告」、一九七七年のマカルー登山の帰途偵察してバルンツェを次の目標と定め、登山解禁の要望書まで出していたが、一九八〇年の解禁時、準備がおくれたため一年延ばしたところ、五隊が入り、二・四登迄なされてしまった。ヒマラヤ登山には、いかにタイミングが大切か、その無念さがよくにじみ出ている。今回はルートを南稜にとり、CIV上部のクレバス帯に悩まされつつも、四月二十四日、二十五日の両日五名が登頂に成功している。

第二部「学術調査報告」では、前回に引きつづき森林型とその分布を中心に、幅広い生態学的調査を実施している。沼田教授は、二十年に亘る東ネパール植物生態調査を通じて、「崩壊しつつあるヒマラヤ」と題し、ヒマラヤの自然保護を呼びかけている。中馬氏の水車の研究もエニクで面白い。

B5判、二七四ページ、昭和五十八年三月、千葉大学ヒマラヤ委員会刊、非売品、前記①と本書については、左記へ申込み入手できる。

③ Structure and Dynamics of Vegetation in East Nepal (M. Numata ed. 1983)

千葉大学によるヒマラヤ研究は、これまで常に、湿潤東ヒマラヤを志向してきた。一九八一年には、地域の植物的自然をトータルに把握べく、雑草、草原、森林の専門家に、日ネ両国の植物分類学者を加えて調査隊を組織した。この調査隊の邦文報告書は、前記②の通りであるが、本調査は、文部省の「科学研究費補助金海外学術調査」の交付を受けて行なわれたので、本報告書はこれに対する公式報告書として、英文で刊行されたものである。

本書の内容は、植生垂直分布、森林、草原の種類、組成、群落構造、遷移について明らかにしているほか、とくにこれまでもほとんど報告がなかった雑草群落についても、日本との比較の観点から研究を行なっている。湿潤東ヒマラヤの多様な植生の生態学的側面を明らかにした貴重な成果である。

B5判、英文一八四ページ、一九八三年、千葉大学ヒマラヤ委員会刊、非売品

④ Biota and Ecology of Eastern Nepal (M. Numata ed. 1983)

一九六三年に行なわれた第一回の東ネパール調査以来、二十年間の間に行なわれた前後四回の調査の成果としては、各々の公式報告書以外に、これまでに関係学会誌に発表した英文論文が42編ある由である。本書はその中の39編を収めたものである。内容はネパール・ヒマラヤにおける日本の学術研究を概観し、ヒマラヤの生態学の問題を論じた編者による序章に始まり、以下第一部、植物相(菌類、地衣類、蘚苔類、シダ植物、高等植物を含む18編)、第二部、

動物相(節足動物に関する11編)、第三部、生態(気象、植物生態、動物生態、自然保護に関する10編)から構成されている。東ネパール・ヒマラヤという一地域の生物的自然を全体的に扱った本書は、ヒマラヤの生態学に対する重要な貢献となることは疑いない。

本書は二十年間にわたる、千葉大学による東ネパール調査の総まとめの形をとっているが、各報告書の英文論文をその都度余分に刷っておき、これを後で並べかえただけで、このような立派な報告書ができあがるというところは、長期間にわたる学術調査がいかに計画的になされていたかを物語っているもので、あらためて敬意を表する次第である。

B5判、英文四八五ページ、図版、写真多数、一九八三年、千葉大学ヒマラヤ委員会刊、非売品 (松田 雄一)

白神山地

佐藤 勉 著
坂本知忠

津軽平野の南西部から、秋田青森県境にかけてひろがる白神山地は、本書のサブタイトルの言う「本州最後の秘境」であろう。市川学園山岳OB会は、この地の登

山記録としては田代岳のものがある程度で、核心地帯のものが無いのに気付く、ここに力を入れた。本書はOB六人がこもも行なった一九七〇年から七六年の山行記録九篇を主体として、その後の三篇、それに山地の概説、山行挿話、マタギの話などを加えて一冊としたものである。

前記九篇は、本会会員の佐藤一

槍ヶ岳開山 播隆

穂苅三寿雄 著
穂苅 貞雄

ひとを評するのに、篤実な人柄という言葉がある。それを援用すれば、これはまことに篤実な書物ということが出来る。

世は滔々とした欧米化時代である。明治鹿鳴館時代も顔までであらう。創刊される大雑誌の誌名は、すべて欧米語(まがい)であり、山もヒマラヤやアルプスであり、山ではないかの如くである。そんな時に、播隆という坊さんの名前を出してみたいところではたしてどれほどの人の耳目をひくであろうか。「開山」などという言葉になじみをもつ人がどれほどいるであろうか。遊園地の開園でさえ(だからこそか、オープンニングという時代なのである。

別に世をすねているわけでもないという世相の中で『播隆』のような本を書く人が、またそれを出版する書店のあることは、激流に流されない篤実な人々がいることを改めて教えられて、素直に喜びたいと思うのである。

「ウェストンの名を賞揚して記念碑を建てても、播隆上人にはそれを捧げぬ」もしウェストンが播

隆上人を知っていたら大なる先駆者として、絶大な讃辞と敬意を上人に献げたであらう。ウェストンを認めるのはよいが、播隆上人を忘れる日本人の浅さを思う」とは、この本の「序にかえて」に掲載されている柳宗悦氏の言葉である。

閑話休題。二十年前に刊行になった同じ著者による『槍ヶ岳開祖播隆』は私家版で、多くの人の目にふれるというわけにはいかなかった。一千部限定のその一冊を、幸いにも私はかつて寄贈をうけて所有しているが、今度のは市販本である。

閑話休題。二十年前に刊行になった同じ著者による『槍ヶ岳開祖播隆』は私家版で、多くの人の目にふれるというわけにはいかなかった。一千部限定のその一冊を、幸いにも私はかつて寄贈をうけて所有しているが、今度のは市販本である。



あり、だれでも購入出来るのはありがたい。三六〇〇円という定価は内容、造本からみて決して高いとはいえない。私も早速購入して、なでたりさすたりして

る。しかも前著を大幅に修正加筆し、新発見の資料なども豊富にあって、播隆という謎の多い人物の生涯と事蹟が克明に跡づけられている。

この種の調査には、すさまじいほどの困難と、苦勞が伴うものである。まして私のように、播隆について皮相な知識しか持たぬ者に

は、その追跡の克明さにただ敬服し、知らぬことばかりがどんどん出てくるのに圧倒される。

播隆の槍初登頂が、従来定説化されていた文政十一年の七月二十八日ではなく、七月二十日であることも、今度の本では訂正されている。

はつきり出てくるし、かつて笠原鳥丸氏が述べた(『山と高原』昭35・4)穂高の高峰にも登っていたという話も、ほぼ確実視されて記載されている。会報「山」四四二号で小林俊樹氏が紹介している新資料なども充分消化したうえで出来上っている今度の本は、前著を数段上まわり、今後の研究者への貴重な贈りものである。

一介の念仏上人播隆は、二十世紀末、ご来迎のようによみがえった。しかも、単なる敬虔な宗教者、狂信者のな仏教者としてではなく、「その心底には、山を愛する烈々たる情熱」があったと言いきっているのは、全く同感、山に登ることに喜びを見出す偉大なパイオニアとしての播隆を見る新しい目であろう。

「仏安置穂高嶽」と記されている問題の「槍ヶ岳絵図」が、部分とはいえ前著では折込別丁で挿入されていたのに、今度は本文共刷で小さな扱いは残念。

A5判、上製函入り、昭和五十七年九月、大修館書店刊、定価三六〇〇円

(大森 久雄)

一三一号(一九七八年刊)に登載された。これはスペースの関係上、やや短縮を余儀なくされた。

この点、本書に於ては記述の幅をひろげ、小見出しをはじめ、天候や時間記録も詳細をきわめて、好個の紀行文となっている。

本文の配列は、山地の概説、紀行(記録)、挿話、マタギ、小屋場、記録と文獻と続き、「本書発刊までの経緯」で締めくくっている。

概説は、飯豊山地とほぼ同じという山城の生い立ち、地質、林相等にふれているが、何よりも意味不明で耳馴れない発音の多い地名の多いのに、異常な魅力を感じてとりこになったという。

だからこそ十回以上も出かけているのであろうが、千葉県市川からこの僻地へ足繁く通うのは大変なことだ。行った以上は当然数日間の山行となる。本書を読むと、ゴールデンウィークなどいの一にに注ぎこんでいる情熱がこちらに伝わってくる。同時に、マタギから入ってはいけな、とされている沢などあつて楽しそうだ。

「白神山地の記録・文獻」の中に、白神山に登山路が出来たのは昭和四十年頃であり、それまでも何回か登られている筈、沢の遡行も同様であるが、登山者による報告が皆無に等しいのは、山地の標高が低く(二〇〇〇メートル内外、最高向白神岳一三四三メートル

ル)、発表に値しないと考えたのか、この秘境が荒されるのを恐れたのか、とある。だが一たび足を踏み入れた者は、峻嶒な地形と悪い天候から、この地がアルピニズムの対象とならないとは考えまい、だから標高が低いだけで、記録発表を控えたとは考え難い、と。

「発刊までの経緯」には、最初の山行記録を『山と溪谷』に発表したところ、反響の大きさに驚き、地元迷惑を及ぼしはしまいかと心配したこと、以後記録発表を小さくし『山岳』に登載したこと、そのうち白神山地が未知の状態に留まり得なくなったばかりか、春秋林道開設の件が起きたこと、もはや詳細な記録を未発表にする理由はない、むしろ破壊前の白神山地の素晴らしさを多くのの人に知って貰うために本にしたこと、など述べてある。

これらの文は謙虚さに終始し、好感がもてる。佐藤君はOB会の主柱であり、私たち南会津山の会の一員でもあるが、まじめな性格と実行力に定評がある。日本山岳会で文獻を調べ、未踏の山谷に入ることが多い。本書は、春秋林道問題の折柄、注目さるべき書といえよう。

四六判、二五四ページ、昭和五十八年七月、現代旅行研究所刊、定価一六〇〇円

(川崎 精雄)



東・西
南・北

甌山山行

秋田支部

本年二度目の当支部山行は、去る十月二十二・三の両日、県南部の奇峰・甌山（九八一・四米）に於て実施された。

山里の出湯「兵平の湯」に午後六時半集合し、さっそく地酒賞味の懇親会を開催。雨音を心配しながら遅々と床につく。

翌朝、林道を一路登山口へ。昨夜以来の雨も漸く晴れ上り、正面に聳える甌山とその岩壁を取り巻く紅葉は実に美しい。

午前八時半駐車場を出発、小沢を二つ渡ってまもなくブナの集積跡地に着く。右手の道を葎を採りながら、山形との県境尾根に出て、踏跡を辿って山形側の沢筋に造られた登山道に出る。この道のすぐ下まで林道が延びており、この山に登る最短コースとなっている。

沢筋の道を少し登って、右手の

急斜面に取付き、グングン高度を稼いで、午前十時半、二等三角点のある男甌山頂に着く（山形側では母子鬼山）。

初冬の雪を戴いた鳥海山や、丁山地、また神室山地方が眺望され、予想をもしない逆転天候に一同歓喜。男性シンボルの奇岩・観音岩を拝み、次の目標の女甌へ向う。

ブッシュの残る急斜面を一気に降り、熊笹の茂る鞍部で休憩。ここから道は名勝沼に至っている。女甌への道はなく、熊笹帯を漕ぐと、間もなくかすかな踏跡のある急斜面の登りとなる。男甌を振りかえり、高度を想像しながらグングン登り、眺望のよい女甌山頂に着く。

先ほど以来の寒風が時折小雪となり、昼食半ばにして急遽甌峠へ下山を開始。ブッシュと急斜面をナラの巨木を愛でながら降下。ブナ帯に入って、まもなく立派な道のある甌峠へ飛び出し、一同一安心。

帰路は、女甌直下にひっそりと佇む名勝沼を探訪し、午後三時駐車場に到着、好時期好天候に恵まれた山行を無事終る。

（参加者）
福田文二、北林嘉鶴子、佐藤兼治、阿部鉄男、福田光子、佐々木安、佐々木民秀、ほか会員外一名

（佐々木民秀）

第26回紅葉会

11月12・13日

静岡支部

四、五日前に降った雪で、一時五合目までの登山道が閉鎖されて、天候が気遣われたが、幸い温かい日和が続く、登山道も開通して素晴らしい天気の日を迎えた。

上り・下りの東海道線で、吉原駅に各地から集合した参加者は、定刻バスに乗り、朝霧高原野外活動センターに向い、三時半頃には現地到着。朝霧高原野外活動センターは県の施設で、東には大沢崩を正面にした粗々しい富士を間近に見、西には毛無山・長者岳・天子岳と続く、広々とした、いかにも高原らしい所。参加者は思い思いにスケッチしたり、写真を撮ったり、夫々心ゆくまで富士山の景観を楽しんでいた。

センターの規則のため、五時より軽く夕食を済ませたあと、五時半より営火場にてキャンプファイアーを囲み宴会にうつる。支部会員の仁藤君が腕をふるった新鮮な刺身を筆頭に、たくさん料理と豊富なお酒で、八時頃まで盛大な前夜祭が行なわれた。

翌日、又々快晴の朝を迎え、二

日酔いの人の中には居たようだが、午前八時バスに乗り、富士宮口新五合目に向う。午前九時三十分新五合目着、ここで、標高二四〇〇米の看板を背に全員で記念撮影を行ない、午前十時出発。登山道には、まだそこかしこに雪が残る、六合目まで約十五分の登りでは、まだ少々物足りない感じ。宝永山火口では少々風に吹かれたが、火口壁の岩肌と周囲の雪景色に、来る人皆足を止めていた。

久し振りに雪山の気分を味わえた方もいたのではないだろうか。この御殿庭コースは、標高二四九〇米の新六合目から、一四六〇米の二合目料金所まで、標高差約一〇〇〇米を下るコースで、落葉松の林あり、ブナの林あり、またコケモモの群生ありで、参加者は夫々のペースで景色を楽しみながら下り、途中御庭で用意したお弁当を食べ、予定時間前には無事二合目料金所に帰着した。一日中快

晴、温かな日和で、これも参加者全員の心がけが良かったからと自賛している。

（参加者）川北仁、錦織保清、森本勇治、大島省吾、関口周也、矢沢義弘、渡辺嘉男、川上光久、金沢喜八、松本慎太郎、佐藤佳年、藤江幾太郎、斎藤桂、川森左智子、三ツ石清、高沢英雄、小野利次、伊藤美、鳥居亮、関塚貞亨、早川良太郎、山本朋三郎、西郷正郎、石間信男、柴田昌亮、鶴見敏彦、大石倬、安間莊、河合俊男、加田勝利、糸賀忠彦、金子誠一、仁王一成、長谷川広司、庄司長生、滝沢芳章、佐野敏郎、池上和男、小島優幸、望月福次、仁藤敏彦、小林清彦、渡辺勝宏、久保田保雄、三井貞彦、秋山いつ子、佐々木好生、服部俊明、一の瀬貴文、久保田全、田辺恵造（以上五十一名）

（田辺 恵造）

諸塚山紅葉山行

熊本支部

熊本支部の恒例の秋季山行は、去る十一月十二日、十三日一泊二日、九州の脊梁である七ツ山々地の諸塚山（一三四二M）で行った。

た。

宮崎県五ヶ瀬町の民宿に午後五時集合。運悪くこの秋一番の寒波にみまわれ、すきま風の吹く部屋の中で、早速夕食会が始まった。ビールで乾杯のあと、会員差入れの酒肴、焼酎で話はずみ、外の寒さも忘れるほど談笑した。

翌十三日は七時起床、八時出発。心配されていた天気は一向に回復せず、登山口に着く頃は曇ま

秋期山行

宮城支部

恒例の秋期登山会が、昭和五十八年十月十五、十六日に南蔵王、山形宮城県境にある、番城山山麓において行なわれた。

十五日、仙台市役所前P.M.一時三十分出発、東北自動車道で白石インターより七ヶ宿町関に着いた。

途中、七ヶ宿ダム工事で水没される部落を眺めながら、宿泊先の関の『本陣』を訪ね、七ヶ宿街道を時間までそれぞれ散策する。

宿場町関での盛大なる宴会は、会員諸氏が持参した各種果実酒の品評会を行ない、自称きのこ博士の飯野氏より、今年の報告やら大層なきのこを御馳走になる。御膳には天然？、鮎の姿焼等、明日の山行天気は拍車をかける。

朝五時三十分起床、六時三十分朝食をすませ、宿を出発。

七ヶ宿街道より滑津大滝のある滑津を通り、境沢の深洞橋の手前より大野沢の林道に入る。道はかなり悪く、車高のある車に分乗して行く。途中道路が崩壊している所もあり下車し、急滝沢と番城山に入る出合点まで、いやがるドラ

イバー諸氏をおだてて上げ、無理矢

理進む。

標高六百米地点の出合に七時半到着した。これよりAパーティーとBパーティーに分かれる。

Aパーティーは、林道沿いに紅葉を楽しみながら、Bパーティーの沢登りの源頭まで回り込んで、標高千五百米付近の鞍部で待ち、芋煮会の準備をして頂くことにし、Bパーティーは沢に入る。

様々のお出で立ちで、狭い沢を登る。きのこのナラタケやヌメリガサを確認し、伐採されて十年程度かと思われる、明るい快適な沢登りだ。サルナシの木や沢ワサビに目をくぼりながら、一向に進まない足を誰も気にする由もない。

一キロ米程度進んだ所で、沢は二俣に分かれ、左俣に進む。二、三米程度の滝が五ヶ所ほどあり、岳人気分させてくれる。昨晚の酒を思い、沢に顔を入れ、気分一心。

源頭直下の沢で農作業ならぬ時間をかけ、芋煮会の用意が出来たとのトランシーバーからの声。みんなにおみやげでもと、山菜に手を休めるでもなく。

源頭の藪はなかなかのもので、平均斜度四五度位で、息も荒くしてAパーティーと合流し、芋煮会の宴、紅葉の花がさく。

A.M.十一時よりP.M.二時までの大芋煮会後、アミダクジで山菜のおみやげを配り、アケビ、サルナシもさることながら、ナナカマ

ド、紅葉、ニシキ木、等々天然が造り出す舞台装置を満喫し、前回の調査の時出合ったカモシカの足音を聞きながら帰路についた。

(参加者)

相沢甚平、遠藤昭治、熊谷正志、熊谷藤子、飯野信、佐々木郁男、佐々木豊喜、千石信夫、高橋功、高橋二義、千田早苗、吉中登、蓬田時男

(佐々木豊喜)

両神山

三水会

昨年十一月の現地集会で、十文字峠から三国峠を歩いた際、中津川の深い谷の向うに両神山を望み、次回の奥秩父峠歩きシリーズは、ここにしようと思った。峠歩きシリーズと銘打ったからには、峠を越えねばならぬ。そうだが、一位ガタワがあるではないか。

西武秩父からタクシーに分乗、薄川ぞいに日向大谷まで入る。途中、大神楽、出原、小倉、集人(あつぱと)と一風変わった名称の村落を通り過ぎる。

日向大谷には両神神社の社務所があり、ここには秩父の王子と謳われた、故原全教さんの詳細な両神山全図が掲額されている。われ

じりの突風で、縮み上るほどの寒さだった。一行九名は西登山口と南登山口に分れ、山頂でほぼ同時に合流。点々と紅葉はあるものの、山はすっかり冬仕度に入り、落葉を踏みしめて登ること約一時間、二等三角点の山頂に到着した。視界はきかなかったが、付近一帯の樹木はすっかり霧氷に覆われていた。

下山路は全員南登山口に向い、

われ一行、社務所の片隅で昼食を認める。

これから辿る清滝口は両神山の表参道と呼ばれ、勸進行者の像をはじめ、多くの石像を送迎して、在りし日の信仰登山を偲ばせる。

両神山は日本武尊が東征の初に、八日かかってこの山に登り、山頂にイザナギ、イザナミの両神を勧請したという故事から、昔は八日見山とも呼ばれていた。

道は薄川本流を左右に渡り返しながらか、ゆるく登って行く。弘法の井戸という水場がある。この水は厳冬期でも凍結しないそうだが、ここから十分あまりで今宵の宿、清滝小屋に到着した。

十月二十八日のテレビで、この両神山の紅葉が紹介されたためか、小屋はほぼ満員の盛況であった。道すがらその美しさは、曇り空もあって、まさに一幅の名画を見る如くであった。

夜半からの雨は降りやまず、翌

途中神武天皇遊行の伝説のある諸塚神社跡を見学、この頃は天気はかなり回復していた。今年最後の紅葉とあって四囲の山々のすばらしい眺めにすっかり気を取り直し、楽しい山行になった。

(参加者)

西沢健一、奥野正亥、石井久夫、本田誠也、大木野徳敏、大木野マツ子、田上敏行、川端浩文、河上洋子

(川端 浩文)

日の山頂行きは中止し、下山と決める。小屋から直接一位ガタワに。ここは、両神山と三笠山の鞍部である。白井差に向う。いわゆる南口である。わずか下ると小沢を横切る。小森川の源流だ。昇竜の滝というのが落ちている。落差二十メートルあり、豊かな水量であった。さらに下って林道に出、たつた二軒しかない白井差の部落に着く。バス停には三十分のアルバイトが残っていた。

三峰口からお花畑に出て、坂倉さんおなじみの不動の湯に山靴を脱いだ。オカッちゃんのお笑顔を脱いだ。温い湯、温い湯が、今回の峠歩きシリーズのフィナーレとなった。とき、58年11月5、6日。

(参加者)

坂倉登喜子、黒石恒、広羽清、斎藤直信、小林碧、伊藤美恵子、石黒和子、岩堀瑞子、高田真哉、他十一名

(高田 真哉)

第16回図書交換会

図書委員会

恒例の図書交換会が、十月二十二日(土)の午後二時から四十余名の来会を得て、本会ルームで行われた。

今年には三田元会長、成瀬名誉会員、深田森太郎氏(久弥氏子息)等から、献呈署名本、アルプス・ヒマラヤの地図、ヒマラヤの写真(パネル・額入り)等が出品され、合せて和書三七四点、洋書五三点、雑誌四八四点、地図三二点、写真一二点、ハガキ一点と、例年通りの賑わいとなった。

とりわけ稀観本はなかったが、深田さんの献呈署名本「ヒマラヤ 山と人」、本会三十周年記念の『山岳図書展覧会目録』(特装本)、また、出品本の中に紛れ込んでいた「横さんが三田さんに出状した葉書」の三点が入札に付され、それぞれ一万八千円、六千円、三千円で落札された。ほかに本田勝一「旅立ちの記」、尾崎

会員・原田幹市氏より、8ミリ映写機(コダック製・ダブル)を寄贈していただきましたのでお知らせします。同氏に厚くお礼申し上げます。

(フィルム委員会)

隆「果てしなき山行」、京大山岳部「インドラサン登頂」、大島亮吉「登山史上の人々」、マクガヴァン「ちべつと紀行」、今西錦司「ヒマラヤを語る」、冠松次郎「立山群峰」が署名入り、廉価、美本等の理由で人気を集めた。今回の総売上は四十七万六千円で、慣例によりルームと図書委員会に二割ずつの寄付をお願いした。

交換会も恒例の行事としてすっかり定着した反面、出品協力者と購入者との一方通行となりがちなことと、参加者の顔ぶれにあまり変化が見られないこと等、運営上の問題が出てきている。次回以降は、「交換会」の主旨を生かすためにも、参加者からの出品と、初めての方々のご参加をお願いしたい。

なお出品には前記の三方のほか、次の方々からもご協力を戴きました。厚くお礼を申し上げます。

(出品者)

鈴木 茂、小野 幸、国見利夫、山崎安治、河野悠二、岡沢祐吉、後藤幹次、大森久雄、伊藤博夫、児玉 茂、嶋原啓佑、菅野弘章、小原晴子、中村小一郎、篠 繁一、岩瀬皓祐、田村俊介、松田雄一、橋爪幸達、島田 翼、伊丹紹泰、砂田定夫、石川治郎、千葉保之、村松紀夫、丹部節雄、坂倉登喜子、望月達夫、今井友之助

(滝川 清)

お知らせ

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

スキー山行

期間 五十九年一月十四日(土)ー十六日(月)

場所 榎池スキー場 東京経済大学榎池山荘

集合 一月十四日午前九時、同山荘集合

会費 会員一〇〇〇円、非会員一四〇〇〇円(二泊四食、懇談会費含む)

定員 三十名

往復とも国鉄指定券(新宿ー信濃森上)をご希望の方は、お申し込みの際、お申し付け下さい。申込・問合せ先

二六二ー四六七二 氷川

注意 前号のお知らせを一部変更しました。ご注意ください。

主催 集會委員会

山スキー技術研究会

山スキーは、いろいろな面で変化の過程にあります。その基礎になるスキー技術はどう進展しているか、各方面のエキスパートよりお話を伺い、論議する夕べを催します。

「登山靴による山スキー」「兼用靴による山スキー」「スキー靴による山スキー」もテーマの一部です。奮って御出席下さい。

講師 青柳 裕樹氏

北田 啓郎氏

小林 政志氏

高田 光政氏

柳沢 昭夫氏

日時 五十九年二月十七日(金)午後六時半ー九時

場所 山岳会ルーム

主催 科学研究委員会

この一本展

山岳図書を語る夕べ

第21回「この一本展」を左記により開催します。

日時 五十九年二月二十五日(土)午後一時ー六時

場所 ルーム・図書室

この展覧会は、会員が山や探険に関するこの一本と思う書物を会場に持参し、展覧に供していただくものです。ご出品の本は、珍しいものであれば、特に制限はありません。なお、展示図書には、原稿用紙で八〇〇字以内の解説をご用意下さい。

第15回山岳図書を語る夕べ

講師 岩科小一郎氏

同日午後三時より、山と民俗の本を中心にしたお話をさせていただきます。(詳細次号)

主催 図書委員会

会務報告

10月

理事会

10月11日 午後6時30分

本会ルーム

出席者

佐々会長、田口、山田副会長

田村、神崎、大倉、西村、赤松、水野、鈴木、平野、平井、絹川、村木、皆川、梅野、高遠各理事

松田監事

飯野、宮下、嶋原各評議員

委員・欠席

河村、長谷川、松家各理事

小倉監事

山口、中村各評議員

1984年7月27日(金)ー8月10日(金)15日間
ソ連・カフカスの山旅 第6回

- 名峰エルブルース山(5,633m)登頂
- 5,000m級の峰々のアルペンスキー
- 3,000m級の氷河トレッキング
- 高山植物の観察・スケッチなどフリータイム!
- 新潟ーハバロフスク(1泊)ーイトコール(10泊)
- ーモスクワ(1泊)ーハバロフスク(1泊)ー新潟

(株)日ソ旅行社 政府登録一般第98号

☎404-1751(代) 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1
パークアベニュービル

報告事項

▽訃報

林和夫氏が九月二十五日交通事故で死去された。

折井健一氏が九月二十九日急性心不全で死去された。

▽ネパール山岳博物館

JAC・JMA・HAJ・日ネの幹部が集り、10月12日ブラッセルで開かれるUIAA会合の日本側姿勢を打ち合わせた。本会より佐々会長、大倉理事が出席。

▽文部省よりソ連航空機利用の自制を要望された。

北アルプスの山小屋を譲ってもよいという話については、なお山研委員会で調査してもらう。

▽冬期無人小屋の利用者のモラル低下につき、北アルプス山小屋組合より警告書が到着。

カンチエング計画近況
隊員が確定しつつあり、12月荷物船出し予定。会員よりの募金を検討中。

▽年次晩餐会を12月3日(土)ホテルニューオータニで開催。

本会運営管理について、内規の充実を図る。

▽ボゴタ遠征について有志募金の要請がある。

▽財務担当理事より

上半期の収支は昨年とほぼ同じだが、支出が若干上まわっている。備品等購入のための特別支出は、先に計画を財務担当理事

に提出すること。仮払金出金の場合、事前に申し出ること。

10万円以上は担当理事に連絡。重要な証書等の保管に関する内規を本日より施行する。

審議事項

▽80周年記念事業準備委員会の委員長に山田副会長、副委員長に中村・飯野両常任評議員を選任し、委員として四常務理事、三常任評議員をあてる。了承。

▽平和と登山の在り方懇談会主催の「映画と講演の夕べ」について、本会は後援はしないが、会員には周知させる。了承。

ルーム日誌

10月

11日(火) 理事会
カンチエングミーティング

12日(水) 図書委員会
高所登山研究委員会

13日(木) 図書委員会
三水会

17日(月) 科学研究委員会
図書交換会

19日(水) 科学研究委員会
カンチエング計画

21日(金) 自然保護委員会
フィルム委員会

22日(土) 科学研究委員会
ポジウム

24日(月) 海外委員会
今月の来室者50名

編集手帖

▽今月は、東・西・南・北の各地から、秋山山行の報告をいただいた。秋の山は、何といっても日本人にとっては、あじわい深いものだ。炉辺閑話も秋の夜長にこそふさわしい。

▽秋田支部会報の最近号に、支部活動状況の報告を、支部の大切な義務と考えていると、書かれてあった。「東・西・南・北」が、各支部、会内グループの山行、活動状況、ニュースを伝える広場となるように努力したい。

▽先日の年次晩餐会には、三四〇人の会員が全国から集まり、盛会であった。支部長会議も開かれ、再来年に迎える創立80周年の記念事業の大綱が発表された(次号)。多くの会員が参加できる有意義な企画の提案が期待される。賛金することだけが参加すること、にはしたくないものだ。

▽来年はブレ80年の年。会にとっても、皆さんにとっても、よいお年でありますように。

昭和五十八年十二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 皆川完一

電話東京(20) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

株式会社 技報堂